

藤堂藩の成立と伊賀

——藤堂高虎・高次・高久を素材にして——

東 谷 智

はじめに

藤堂藩の時期区分をする場合、三代藩主高久期を完成期とみるのはおおむね一般的な理解だと言えよう。藤堂高久は、寛永一五年（一六三八）に生まれ、寛文九年（二六六九）に二代藩主高次の跡を継いで藩主となった。元禄一六年（二七〇三）に没するまで藩主の地位にあり、名君・英主として知られている^①。また、藤田達生氏は、二代藩主高次から高久への代替わりの過程において、名張藤堂家の家臣化、支藩久居家の分立など藩主権力の確立が意図され、藤堂藩は三代藩主高久の段階から本格的な安定期を迎えたとしている^②。

高久期を藤堂藩の完成期、安定期とみることに筆者も全く同感である。以前、筆者は藤堂藩の成立期から高久期までの時期について、伊賀国の役割を中心に分析した^③。その際、高久期に至る藤堂藩の動向を以下のように時期区分した。

第一期 慶長一三年（一六〇八）～承応二年（一六五三）

高虎個人の上方での力量（築城、朝廷、軍事）によって伊賀の役割が決定した時期

第二期 承応三年～寛文九年（一六六九）

高虎死後、藩政機構が形成され、高次から高久への代替わりが準備された時期

(二七)

第三期 寛文九年以降

高久の三代藩主襲封後

その上で、第二期では、高虎個人の力量によらない伊賀の役割を藤堂藩が模索し、第三期にかけて、城和領における土砂留めを担当する、言わば上方における民政の一端を担う藤堂藩とそれを支える拠点としての伊賀という新たな位置付けが行われたことを述べた。また、この過程が藩政機構の整備と密接に関連していることも述べている。藤堂藩が実態として民政の役割を担うことになったことは確かである。しかし、藩祖高虎が伊賀を拠点として上方において一定の政治的・軍事的役割を果たしたという事実が、二代目以降の藩主にどう引き継がれていったのかという点は全く検討できなかつた。つまり、伊賀における藩主の位置について、二代目藩主以降の検討が出来ていないのである。残された課題として、二代目以降の藩主が藩祖高虎をどう位置付けたのかという点を伊賀との関わりで明らかにすることが挙げられる。以下三章にわたって検討していきたい。

第一章 歴代藩主の伊賀入国

表1は、初代から三代の藩主が伊賀に入国した事例を表にしたものである^④。この表を参照しながら、歴代藩主の伊賀入国の特質およびその変遷を検討していきたい^{⑤⑥}。

表1 藩主の伊賀入国一覧

	日付	藩主	入国	期別	備考			
1	慶長16年 (1611)	高虎	高虎		伊賀にて越年、慶長17年元日の御礼を伊賀で受ける			
2	慶長20年 (1615) 閏6月14日				伊賀へ凱陣			
3	元和8年 (1622)				將軍家(秀忠・家光)御上洛の為、伊賀へ御立ち寄る。藤堂式部方に止宿(実際の將軍上洛は元和9年)			
4	元和9年 (1623)				將軍家(秀忠・家光)のお供の後伊賀へ立ち寄る			
5	寛永2年 (1625) 12月				伊賀で越年、寛永3年元旦の御礼を伊賀で受ける			
6	寛永5年 (1628) 3月				江戸から直接伊賀へ入国			
7	寛永11年 (1634) 6月	高次	高次	前期	將軍家光上洛のため先だて伊賀へ入国、伏見経由で入京、堀川屋敷に逗留			
8	寛永11年 (1634) 8月中旬				京都より伊賀入国、その後津へ移る			
9	寛永12年 (1635) 12月23日				伊賀入国、御越年、正月に津へ移る			
10	寛永15年 (1638) 8月上旬				伊賀入国			
11	正保元年 (1644) 10月下旬				伊賀入国			
12	慶安元年 (1648) 4月18日				江戸から直接伊賀へ入国			
13	明暦4年 (1658) 5月4日				高久	高久	後期	初の伊賀入国
14	万治3年 (1660) 5月29日							伊賀入国、采女方へ御入り
15	寛文2年 (1662) 7月6日							伊賀入国
16	寛文4年 (1664) 6月8日							伊賀入国
17	寛文6年 (1666) 7月8日							
18	寛文8年 (1668) 7月19日							
19	寛文10年 (1670) 8月23日							
20	寛文12年 (1672) 8月11日							
21	延宝2年 (1674) 8月29日							
22	延宝4年 (1676) 8月晦日							
23	延宝6年 (1678) 8月29日	高久						

注. 高久の伊賀入国の事例は、便宜上延宝6年までを表に記載したが、その後も定期的な入国が続いている。

伊賀入国について最も大きな画期は、明暦四年(13)である。これ以前は数年に一度であった入国が二年に一度と定例化されたことが表より読み取れる⁽⁷⁾。慶安元年までの事例(1~12)を前期、明暦四年以降(13以降)の時期を後期としてそれぞれの時期の特質を検討していきたい。

前期では、入国の理由が記載されている。將軍上洛にともない、京都への往復の途上で入国する事例や(3・4・7・8)、伊賀で越年をし、年頭の御礼を家臣から受けている事例(1・5・9)、大坂の陣後の凱旋入国(2)等の理由がみられる。藤堂藩は、上方における高虎個人の能力を背景として伊賀を領有し、その役割が高虎以後にも引き継がれていたことを示している。

また、「高次公御上国、直二伊賀江被為入」(6)、「公木曾路ヨリ直二伊州へ上着シ玉フ」(12)と江戸から津に立ち寄ることなく、直接伊賀に入国している。伊予から伊賀・伊勢への移封は、「伊賀二移封シ、伊勢十方石ノ地ヲ併有ス」(「賜書録」)とのちに記録されているように、藤堂藩の役割として伊賀の守衛に力点があったことが指摘されている⁽⁸⁾。幕府から所領を認められた領地宛行状では、所領の筆頭に「伊賀国一円」とあり、次いで伊勢国の所領が列記されていることから明らかに⁽⁹⁾、藤堂藩の本拠は伊賀であったと言えよう。

前期では、藤堂高虎の能力に応じて伊賀が所領となり、その役割に応じて不定期に藩主の伊賀入国が行われ、高次期まで継続していた。

先に指摘したように、明暦四年以降、二年に一度の伊賀入国が定例化する。後期の入国形態をみると、通常六月から八月にまずは津に入城し、時間を余りおかず伊賀へ入国するのが通例となっていく。また、入国の理由を特記することもなくなる。これは、参勤交代のサイクルに合わせた伊賀入国というスタイルが次第に確立されていったことを意味する。また、前期では、津に立ち寄ることなく直接伊賀に入国した事例が見られたことと大きく異なる点である。

注意したいのは、明暦四年の高久入国について、「和泉様御部屋住中初而伊賀江被為入候事」⁽¹⁰⁾とあるように、明暦四年段階における藩主は高次であり、高久は「部屋住」、つまり藩主にまだ就任していないという点である。すなわち、「部屋住」の高久によって始められた藩主の伊賀入国が、寛文九年の高久藩主就任後も引き継

がれて定例化していったのである。

以上、藩主の伊賀入国について概観し、明暦四年以前と以後で入国の様相が質的に異なることを指摘した。しかし、明暦四年から寛文八年の入国は、藩主就任前の高久による入国である。次章において、伊賀入国の定例化について、その形成過程を検討することに加え、「部屋住」の高久が入国したことの意味を明らかにしていきたい。

第二章 伊賀入国の定例化

1 明暦四年の伊賀入国

明暦四年（一六五八）、高久が江戸から津へ上国し、次いで伊賀へ入国した。【史料1】は、その様相について記した史料である。^①

【史料1】

明暦四戊五月四日

一、和泉様御部屋住中初而伊賀江被為 入候事

△采女阿波江御迎ニ出候事

△此節御着座・御礼之次第御書付、反故長持之内ニ有之

廿八日

△於御居間御食被下、御数寄屋ニ而御茶被下之

△右与頭一列也

△此時節組頭ハ後生ノ番頭ノ事ナリ

△探幽筆竹林七賢、采女拝領之

△此竹林ノ七賢ハ御掛物ナルヘシ

六月朔日

△御差用之御脇差、長門元光拝領之

六日

△笠置江御出、加茂御一宿ニ而御帰也

△可休江被成御座

△万町下屋敷ナラヘシ、御在伊賀中采女方江之御成被下物等も有ヘシ、然

レトモ委ク難知

△五月十五日、采女宅へ御成之上御城御巡覽、其外二千石以上へ段々御

成有之

△同人江被下物左之通

御召物五 袷一 単物一 帷子一

大樽二 肴両種 干 鱈一箱

こんふ一箱

御茶入

『永保記事略』が編纂された段階では、五月四日の一つ書きに加え「△」として勘考が加えられ、本文が編纂されたが、後世に朱筆によってさらなる勘考が加えられている。

伊賀における高久と家臣の対面について検討する。五月一日には、城代である采女元住の屋敷、および二千石以上の家臣の屋敷へ高久が御成をしている。また、六月六日には先代の城代である可休（元則）の屋敷へ御成をしている。城代を始めとして、主要な家臣との対面は、御成という形式、すなわち家臣宅への訪問という形をとっていたのである。

また、五月二八日には、組頭（番頭）と対面している。場所は、上野城内の御屋敷^②にあった居間と数寄屋であり、御屋敷の公的な空間ではなく、プライベートな空間での対面であった。御屋敷の公的な空間で御目見えをする――主要な家臣が登城する――という形式とは異なっていた点を指摘しておきたい。

2 「御成」から「御目見」へ

万治三年（一六六〇）、寛文二年（一六六二）にも高久は伊賀へ入国する。『永保』には詳細な記事がなく、家臣団への御成りという形式での対面が明暦四年に引き続き行われたものと考えられる。

この形式が大きく変わるのが、寛文四年である。⁽¹³⁾

【史料4】

- ^(高久)一、若殿様六月八日七つ時分、伊賀へ御着座、御家中侍衆不残藤堂式部殿前より内膳殿廻り迄^(並)なみ居御目見、八兵衛・十郎右衛門・大和代官衆黒御門之内
二、御目見、采女殿・伊賀奉行衆八本御門石だんの下にて 御目見ノ事
一、同日、御着座被為成、八兵衛ハ鯉一献進上、十右衛門ハ梵天瓜二籠進上、御居間にて 御目見ノ事、就其十郎右衛門ハ十日子共衆之 御目見ニ 御目見仕候ニも不及之旨、孫八郎殿御申候ニ付 御目見不仕候事
一、九日、御家中不残召出し 御目見ノ事
一、十日、御家中子共衆召出し 御目見ノ事
一、十一日、寺社・町人・大庄屋 御目見、(後略)

【史料4】は、寛文四年六月八日、伊賀に入国した高久が御屋敷に到着した際、家臣が上野城内で高久を出迎えた様子が記されている。出迎えの場所は、藤堂采女と伊賀の奉行は御屋敷の門前にある石段の下であり、西島八兵衛などは黒門の門内で、その他の藩士は西大手門前の藤堂式部の屋敷前から渡辺内膳の屋敷廻りまでである。⁽¹⁴⁾

注目したいのは、出迎えの場が城内であり、そのことを高久の「御目見」と記している点である。同様に同日、御屋敷内で西島八兵衛らの対面についても「御目見」と認識されている。九日の家中の対面、一〇日の家中の子供の対面では、「召出し」の上で「御目見」が行われている。つまり、一連の対面は、いずれも高久のもとへ家臣が参上する形式をとっている。これは、従来「御成」として高久が家臣の屋敷を訪れる形式で対面したことと比較して、家臣に対する高久の位置が相対的に上昇したことを意味する。伊賀家臣団における高久の立場―次期藩主としての立場―が、伊賀入国における対面儀礼を通じて形成され、寛文四年に成立したのである。

寛文四年以降、『永保』『城和』ともに、上野での御目見に関する記事は減少し、具体的な儀礼の様相については記載されなくなっていく。これは、寛文四年の入国

時における儀礼の形式がその後引き継がれ、定式化していったことを意味する。また、参勤交代と連動した伊賀入国が実施されていくことは、藤堂藩における伊賀国の位置が決定していくことと連動している。前稿では、この過程を、朝廷対策や上方における軍事における役割―高虎個人の能力によって果たしていた役割―から山城・大和を含む広域行政における役割―個人の資質に左右されない役割―へと、藤堂藩の役割が変化し、それに対応する藩政機構が整備されていく過程として評価した。では、伊賀入国が定例化されていくことは藤堂藩にとってどのような意味があったのだろうか。また、高虎が朝廷対策や上方における軍事力という役割を担ったということは、その後の藤堂藩においてどのように位置付けられていったのだろうか。次章において検討していきたい。

第三章 高久代替わりにおける伊賀国の位置付け

1 西島八兵衛の覚書と高久

伊賀入国の儀礼が確定した寛文四年、伊賀滞在中の高久に一通の覚書が呈上された。⁽¹⁵⁾ 覚書の作成者は西島八兵衛である。この覚書は長文であるため引用は省略するが、内容やその目的については『城和』の解説が的を射ている。⁽¹⁶⁾

三代藩主高久に祖父高虎の側近にあつた者として、高虎の功業を認識してもらう為に(西島八兵衛が)奉上了した書類の下書きである。主として大坂両陣の高虎の活躍を中心とし、其の後の二条城、大坂城の縄張りや、家康秀忠父子と高虎との親密な関係など、一々事象を書き上げている。

この覚書は、一読すれば、高虎の上方における業績が列挙されており、次期藩主高久に対して高虎の業績を強く認識させる内容となっている。また、高虎の業績を近くで知っている西島八兵衛が作成した覚書であり、伝聞や書物から得られる知識に較べて格段に重い意味を持っている。次期藩主高久の心構えの中核は上方における高虎の業績であり、生き証人としての西島八兵衛がその業績を伝える役割を担っ

たのである。

注目したいのは、この覚書が呈上されたのが、寛文四年、伊賀にいた高久と家臣との「御目見」が終了した直後である点と、覚書を受け取った場が上方で能力を発揮した高虎の拠点であった伊賀だという点である。藩主となる高久は、祖父高虎を引き継ぐ存在として伊賀の家臣団に認識され、高虎と高久を結びつける場として伊賀が選ばれたのである。

ではなぜ高虎を引き継ぐ高久という位置付けがなされたのだろうか。【史料5】は西島八兵衛の覚書の一部であり、大坂の陣における高虎および家臣の活躍を述べた直後の箇条である。⁽¹⁷⁾

【史料5】

- 一、高山様(高虎)・井伊直孝(分綱) 掃部殿金銀之ふんどう御拝領之刻、過分之御加増可被進と御内談
- 二御座候処、高山様之やうなる大心ニ而御功者なる大将ヲ過分の大名ニ被成候而ハ後ニむつかしき事も可有御座と御さ、への人御座候而、御加増少分
- ニ御座有たると取沙汰御座候キ
- 一、御加増すくなく御座候儀、南光坊ひそかニ御くやみ被成候へハ、高山様、南光坊を散々御しかり被成候、御意之趣ハ略仕候
- 一、夏御帰陣以後、井伊掃部殿ハ早々江戸へ御くだり、我ひとり手柄之やうに御申なし、じまん被成候、其以後 高山様御くだり被成候へとも少しも御じまん不被成候処、自然ニ 高山様之御手柄かくれ無御座候ニ付、掃部殿前(廉)かど自身之取成はげ申候而、高山様ヲ江戸中ニ而かんじ申たる由風聞御座候(剥)
- キ

大坂の陣後の論功行賞として、彦根藩は一五万石から二〇万石への加増が、藤堂藩は二七万石から三二万石への加増があった。一条目では、藤堂藩の働きに比して加増が「少分」であるとしている。その理由として、高虎を「大心ニ而御功者なる大将」として、もし高虎が分不相応の「大名」になったとしたら、万一の時に軍功を発揮することが出来なくなるので加増が少なかったとの世間の評判を記している。

言うまでもなく、加増が多かった彦根藩を「過分の大名」と対比的に捉え、藤堂藩の軍事的な能力を際立たせているのである。

こうした彦根藩との対抗関係は、三条目にもみられる。直孝は、いち早く大坂の陣後に江戸へ下り、自分一人の手柄だと自慢した一方、高虎は少しも自慢しなかった。しかし、高虎の手柄は明らかなので、直孝がうまく回り回ろうとしたことが露見し、高虎の人柄が江戸中で高まったことが記されている。ここでも直孝との比較の中で高虎の人柄を強調しつつ、藤堂藩の加増高の少なさが諒解できるようなエピソードとしている。また、二条目では、藤堂藩の加増高が少ないことを悔やんだ南光坊天海に対し、高虎が散々叱つたことが書かれているが、これも高虎の軍功と人柄を際立たせる話になっている。

寛文期の藤堂藩は、彦根藩を強烈に意識しており、その根源は大坂の陣における活躍とその後の処遇に基づいていた。⁽¹⁸⁾

寛文期以前、藤堂藩が彦根藩を強く意識せざるを得ない事情があった。寛永九年に藤堂藩が伊賀・伊勢から国替えになることが江戸の大名間で噂になっていた。⁽¹⁹⁾この噂は、彦根藩の井伊直孝が伊賀に国替えになり、その結果、押し出された形で藤堂藩の国替えが実施されるというものである。結果として国替えは実施されなかったものの、伊賀国において、現状において藤堂藩の果たすことが出来る役割として広域行政が新たに見出されるきっかけになった。

一方、高次が藩主であった時期は、高虎死後、高久への代替わりまでの時期である。特に、寛文元年以降、高次は將軍から在江戸の奉公を求められ、国元に帰ることがなかった。高次不在の体制づくりが課題となり、同時に高久の藩主襲封の土壌づくりが必要となった時期である。こうした状況の中、在江戸の高次の名代として次期藩主の高次の伊賀・伊勢帰国が明暦四年に始まった。その際、高虎期における伊賀国の役割をどう引き継いでいくかという点が課題であり、高虎と高久をどう結びつけるのが求められたのである。現実における役割を見出し、一方ではかつて担った役割の引き継いでいくという、相反する問題に 대응することが高次期の課題であった。

前稿で述べたとおり、前者は、土砂留めという広域行政を藤堂藩の伊賀国が担う

ことで実現した。後者は、高虎と高久の強い結びつきを作り上げていくことにかかっている。先にみた西島八兵衛の覚書以外にも、結びつきの強化は行われていた。

2 高虎権威の浮上と高久

【史料6】は、寛文九年（一六六九）、高久が藩主襲封に際し、江戸城で將軍に謁見した様子を記したものである。²⁰⁾

【史料6】

（寛文九年）十月二十三日襲封を謝するとき御側近くにめされて、祖父高虎が累年の忠功をおほしめさる。汝壯年たりといへども祖父に劣らず其志を續、父に代りて精勤すべきむぬ仰を蒙ぶる。

將軍家綱は高久を側に召し、高虎の忠功を褒め称え、高久が高虎の志を引き継ぐようにとの言葉かけた。高久襲封に際し、高久が祖父高虎の忠功を引き継ぐ存在であることを將軍が明言したことを意味し、高久にとっては高虎の後継者としての正当性を担保するものであった。

かかる正当性の確保は、高久襲封以前から綿密に準備されていた。【史料7】は、万治三年（一六六〇）六月九日、江戸城におけるエピソードである。²¹⁾

【史料7】

一、殿様高次公、御先代^{（高虎）}御忠節之儀、御老中方々 公方様家綱公江被仰上候由之事

ム伊州へ相聞へ候ハ同月廿日頃歟

江戸城において藩主高次は、高虎以来の將軍家への忠節について、老中を通して將軍家綱に言上している。同年五月には勅使・院使の江戸参向にともない、多くの公家が江戸に滞在し、江戸城内で様々な儀礼が行われていた時期である。²²⁾したがって、ここで言う「御忠節」は、朝廷対策における高虎の事蹟を強く意識している

表2 高久襲封の過程

年代	事項	備考
承応3年 (1654)	高次の隠居表明①, 高久の和泉守叙任	
明暦4年 (1658)	次期藩主高久, 伊賀へ初入国	
万治3年 (1660)	高次, 高虎の軍功を將軍に言上する (江戸)	勅使など江戸参向中
	將軍への言上が伊賀へ伝わる	高久の伊賀在国中
寛文元年 (1661)	高次の隠居表明②	
寛文4年 (1664)	伊賀在国中の家臣団対面儀式が成立	「御成」から「御目見」へ
	西島八兵衛が高久に覚書を呈上する	高久の伊賀在国中
寛文5年 (1665)	高次の隠居表明③	
寛文9年 (1669)	高久が藩主となる	

考えられる。つまり、江戸城における勅使の謁見という機会を通じて、朝幕間において高虎の担った役割を將軍が理解し、將軍権威を背景として幕府、朝廷、諸大名にその役割を再認識させる意図があったのである。また、高次が將軍へ言上したとの報せは、六月二〇日ごろに伊賀へ届いている。

六月二〇日は、次期藩主の高久が伊賀入国中のことである。²³⁾つまり、江戸で高虎の事蹟が再認識されたことが、高久在国中の伊賀へ伝えられたのである。これは、伊賀国を媒介とした高虎と高久の結びつきについて、江戸において將軍によって正当性が認められ、その正当性が江戸から伊賀に伝わったことを意味する。この正当性は、次期藩主高久が伊賀付家臣との対面を通して次第に浸透していくこととなった。

藤堂藩は、高次から高久の代替わりに当たって入念に高虎権威を利用し、その正当性を示す象徴的な場として伊賀を活用した。では、その始まりはいつに求められるであろうか。承応三年（一六五四）、高次は隠居表明（一回目）するとも高久が和泉守に叙任する。高次の隠居は慰留されるものの、高久への代替わりの方針を明示するとともに、高久が高虎と同じ和泉守という官途名を名乗ることを通じて高虎と高久を結びつけることを開始した。

本稿で検討した事例を時系列で整理したのが表2である。高次の最初の隠居表明

以後、高次襲封について段階的に準備され、高虎との結びつきの強化が行われた様子がはっきりと読み取れる。高次から高久への代替わりの準備過程において、藤堂藩における伊賀国の位置付けが変化し、伊賀国には広域的な民政を担うという新たな役割が与えられた。この変化と全く同時並行で、高虎権威の活用による高久襲封の過程は進められた。つまり、高虎の能力による伊賀の位置付け（築城、軍事、朝廷）は、高虎と高久の結びつきを強化する中で、藩主高久に引き継がれていったのである。

では伊賀国を媒介として結びついた高虎と高久の関係はその後どういった推移をたどるのだろうか。²⁴元禄一六年（一七〇三）四月二十九日、藩主在任中に江戸で高久は没する。高久の遺骸は五月六日に江戸を出発し、中山道を経由して六月一日に伊賀に入国し上野城の御屋敷に到着する。²⁵翌一九日、御屋敷を出棺して「長田御山 飯御魂屋」に棺を納められた。後に「御廟」と呼ばれる建物も建てられ、墓所としての様相が整えられた。

藤堂藩の歴代藩主は、津の寒松院か江戸の寒松院に埋葬されるのが通例であるが、唯一高久が例外である。その理由は、伊賀国長田山に葬るようにとの高久の遺言があったからである。それ以後、長田山の「御廟」は、その後の藩主や藩士などが廟参し、藩主の墓所として定着していった。これは、高久の墓所を伊賀国に作ることに、上方における高虎の役割を象徴する場としての「御廟」とし、藤堂藩の紐帯の要とすることを意図していたのではなからうか。この点を物語る事例を紹介したい。

幕末維新期になると、上方における情勢の変化にともない伊賀国での軍事的緊張が高まってくる。嘉永六年（一八五三）二月二十五日、伊賀城代藤堂采女元晋は、自らの家臣等を引き連れて長田山で軍事訓練を行う。²⁶軍事的な緊張の高まりの中、軍事訓練の場として長田山がクローズアップされたのは、高久の廟所であることがその理由である。しかし、より重要なのは、高久の廟所が高虎を想起させる場、つまり高虎の上方における軍事的な事蹟を思い出させる場として認識されていたと考えられる点である。伊賀国を媒介として高虎との結びつきを強めた高久の墓所が、幕末には高久の「御廟」を通して高虎の軍事力を想起させる回路として機能してい

たのである。このことは、大坂の陣における藤堂藩の軍事力を支えたのが伊賀国の家臣団であったことと相俟って、幕末維新期に伊賀国を前面に押し出した軍事行動を藤堂藩がとることにつながっていく。すでに、指摘があるように、山崎の合戦や戊辰戦争に従軍した藤堂藩は「伊州藩印」という印章を用いており、「伊州藩」という意識を持っていた。²⁷幕末維新期に軍事的な役割としての伊賀国が再浮上したと言えよう。

先に示した、伊賀城代の軍事訓練の事例を併せ考えると、高久の死後、高久の廟所が高虎の役割を象徴する場となっていたと考えられる。

おわりに

以上三章にわたって藤堂藩の成立と伊賀について論じてきた。藤堂藩は、高次期に、高久への代替わりを準備する過程の中で、実質的な役割（民政）と凍結された有事体制の役割（軍事）を形作っていった。その過程では、伊賀入国と御目見という儀礼を通して高久と家臣団の関係を形成するとともに、高虎権威を利用した高久の藩主としての正当性を確保していった。民政、軍事ともに、高虎が拠点とした伊賀国がそれをささえる場として意識されていたのである。

注

- (1) 深谷克己『津藩』（吉川弘文館、二〇〇二）。
- (2) 藤田達生『江戸時代の設計者―異能の武将・藤堂高虎』（講談社現代新書、二〇〇六）。
- (3) 東谷智「藤堂藩伊賀国の役割と藩政機構―城和領と広域行政をめぐって―」（藤田達生『藤堂藩の研究 論考編』清文堂出版、二〇〇九）所収。以下、この論考で明らかにした点について注記する場合、「前稿」と表記した。
- (4) 史料上は「御越国」と表記されることもあるが、ここでは「入国」に統一した。
- (5) 慶長一三年（一六〇八）八月、寛永一七年（一六四〇）八月は「永保記事略 附録 十一」（名張藤堂家歴史資料目録）名張市教育委員会、一九九二、寛永一七年一〇月以降は上野市古文献刊行会『永保記事略』（上野市古文献刊行会、一九七四）によって作成し、適宜『公室年譜略』（清文堂出版、二〇〇二）で補った。なお、以下の行論において『永保記事略』を『永保』と略記した。

- (6) 以下の行論中、伊賀入国の事例を示す場合、表中の通し番号を(7・8)の様に併記した。
- (7) 本稿では、『永保』の収録範囲を対象としたため、寛保元年(一七四一)の越国までを検討の対象としている。なお、原則二年に一度の入国であるが、藩主家の服喪などにより、このサイクルが変更となる場合がある。
- (8) 注(1)前掲書。
- (9) 「領知目録書抜」(国立公文書館所蔵)。
- (10) 『永保』明暦四年五月四日。
- (11) 『永保』明暦四年五月四日。以下、史料の引用に際し、句点、中黒などを適宜補った。
- (12) 上野城内には、御屋敷あるいは御殿と呼ばれた伊賀・山城・大和を管轄する役所と、御城と呼ばれる上野城代家老の役所があった。御屋敷は天守台の西方にあり、御城は筒井時代の本丸(天守台の東方)にあった(福井健二『絵図からみた上野城』(財)伊賀文化産業協会、二〇一〇)。
- (13) 上野市古文献刊行会編『藤堂藩大和山城奉行記録』(清文堂出版、一九九六)寛文四年六月。以下『城和』と略記する。
- (14) 門前、石段、黒門の位置については福井健二氏のご教示を得た。
- (15) 「高久様へ上ル覚下書」(寛文四年六月一日)『城和』所収。
- (16) 括弧内は筆者が補った。
- (17) 『城和』。
- (18) 寛永期には井伊直孝が幕政に参与し、三〇万石まで加増され、譜代筆頭の大名となった。こうした事柄も含めて、寛永期には大坂の陣を端緒とした彦根藩と藤堂藩との対抗関係が意識されていたと考える。
- (19) 藤井讓治『江戸幕府老中制形成過程の研究』(校倉書房、一九九〇)。および前稿。
- (20) 『新訂寛政重修諸家譜』第十四(統群書類従完成会、一九六五)。
- (21) 『永保』。
- (22) 「嚴有院殿御実紀」卷十九(徳川実紀)第四篇。
- (23) 高久は五月二十九日に伊賀入国、六月三〇日に津へ帰っている(『永保』)。
- (24) 以下の記述は『永保』による。
- (25) この時、「津丸の内は御廻り迄三而」とあるように、津城に入城することは目的ではなかった。
- (26) 上野市古文献刊行会編『庁事類篇』下巻(上野市立図書館、一九七七)。
- (27) 伊賀古文献刊行会編『藤堂藩山崎戦争始末』(清文堂出版、二〇〇八)。同書では「伊州藩」という意識の背景を、旧来の保守的な立場を崩そうとせず、幕府方に付こうとする津の藩首脳部に対して、伊賀の藩士が抵抗したとみるべきとの見解を示している。しかし、戊辰戦争において新政府軍に従軍した藤堂藩は、箱館近辺で「伊州藩」として西

洋銃の調達をしている。津と伊賀の対抗というよりも、軍事動員と伊賀国との結びつきから、自然と「伊州藩」という意識が生じてきたと考えるのが妥当である。

なお当該史料は、二〇一二年刊行予定の『伊賀市史』第五巻資料編に収録予定である。

【付記】

本稿は、二〇一一年一月六日に伊賀上野城築城四〇〇年イベント(同実行委員会主催)の一環として行った講演(於お城会館)を原稿化したものである。

現在、伊賀市では『伊賀市史』の編集事業を行っており、筆者は近世史部会(藩政)の編集委員をつとめている。種々のご意見を賜った同部会の執筆委員のみなさま、伊賀市史編集室のみなさまに謝意を表したい。